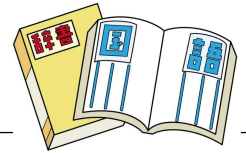


教科シラバス (HP掲載用)

大里中学校 国語科シラバス 2 学年



1 授業のねらい（身につけて欲しい力）

教科書名「現代の国語（三省堂）」
補助教材「」

- ・社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。
- ・論理的に考える力や共感したり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- ・言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

2 授業の進め方

- ・課題を提示し、自ら考えたり他者の考えに触れて考えを広げたり深めたりする時間を設定します。
- ・教師の指示や説明は簡潔にし、対話を重視しながら、多面的・多角的に考える授業を心がけます。
- ・ICT等を活用し、視覚的に伝わりやすい提示の仕方を心がけます。
- ・視覚から入る情報を理解しやすい整然とした板書を心がけ、「聞く」「書く」のメリハリをつけた授業を心がけます。

3 学習上の留意点

- ・学習用具（教科書・ファイル・筆記用具）は、休み時間で準備しておきましょう。
- ・テストを受けるときや、ノートやワークシート・プリントに取り組むときには、丁寧な字で書くようにしましょう。
- ・授業で分からなかったところや、苦手と感じるところは、そのままにせず、友達に教わったり先生に質問しましょう。
- ・毎時間の授業で学んだことは、振り返りシートに書いて学びの足跡を残すようにしましょう。

4 補助教材の活用方法（自学自習の進め方）

- ・スタディサプリの活用を奨励します。
- ・単元とリンクした問題と発展問題の活用を奨励します。
- ・読書（読書単元との関連）を奨励します。

5 単元テスト

- ・授業で扱った事項、およびテスト前に指定した範囲から出題し定着を図ります。
- ・単元テストや漢字テスト等の範囲は事前に伝え、定着を図るため再テストを実施します。
- ・高校入試や各種調査等で問われる「思考・判断・表現」を問う問題も含め出題します。

※単元テストのみで評価が決まるわけではなく、次の評価の内容と方法で総合的に学習状況をみとって評価します。

6 評価の内容と方法

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
内容	社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりしているか。	論理的に考える力や共感したり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりしているか。	言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養っているか。
方法	振り返りやワークシートに書かれた内容や、単元テスト、漢字テストから学習状況を見取り、各単元ごとで示す「ルーブリック」に照らして評価します。		

7 授業計画（見通しを持って予習・復習の自学自習に取り組みましょう。提出物も忘れずに！）

期	月	単元名・学習項目	評価方法	到達目標
1学期	4	【読む（詩）】 名づけられた葉 【読む（小説）】 セミロングホームルーム ○言葉発見1 話し言葉と書き言葉 【話す・聞く】グループディスカッション ○漢字を身につけよう① 【読む（説明）】 宇宙に行くための素材 【読む（説明）】 人間は他の星に住むことができるのか 【書く】 心をこめて分かりやすく書く ○言葉発見2 言葉のはたらきとコミュニケーション ○漢字を身につけよう②	・単元テスト ・漢字テスト ・ノート ・ワークシート ・振り返りシート など	【知識・技能】 社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようになる。
	5	【読む（解説/短歌）】 短歌の世界/短歌十首 【書く】 表現の仕方を工夫して豊かに表す ○文法の窓1 用言の活用		【思考・判断・表現】 論理的に考える力や共感したり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようになる。
	6	【読む（報告）】 壁に残された伝言 【読む】 私の読書体験 生涯の友と出会う ○漢字を身につけよう③		【主体的に学習に取り組む態度】 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。
	7			
2学期	8	【読む（論説）】 味は味覚だけでは決まらない ○言葉発見3 敬語の意味と種類 ○文法の窓 表現につながる文法 【話す・聞く】 プレゼンテーション ○漢字を身につけよう④ 【読む（古文）】 枕草子・徒然草 【読む（古文）】 平家物語 【読む（漢文）】 漢詩の世界 ○漢字のしくみ1 熟語の構成・熟字訓 ○漢字を身につけよう⑤	・単元テスト ・漢字テスト ・ノート ・ワークシート ・振り返りシート など	【知識・技能】 社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようになる。
	9	【読む（解説）】 マンガ 情報の扱い方 【読む（論説）】 一〇〇年後の水を守る 【読む（論説）】 飲み水は不足しているか 【読む（図表）】 水問題に関する資料 【書く】 複数の情報を関連づけて根拠を明らかに示す ○文法の窓2 助詞・助動詞のはたらき ○漢字を身につけよう⑥		【思考・判断・表現】 論理的に考える力や共感したり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようになる。
	10	【読む（詩）】 大阿蘇 ○言葉発見4 類義語・対義語・多義語 【読む（小説）】 小さな手袋 【書く】 読みたくなるしくみを工夫する 【話す・聞く】 読書活動 ビブリオバトル ○漢字を身につけよう⑦		【主体的に学習に取り組む態度】 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。
	11			
	12			
3学期	1	【読む（論説）】 動物園でできること 【書く】 構成を工夫して考えを伝える ○漢字のしくみ2 熟語の読み ○漢字を身につけよう⑧	・単元テスト ・漢字テスト ・ノート ・ワークシート ・振り返りシート など	【知識・技能】 社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようになる。
	2	【読む（小説）】 走れメロス ○漢字を身につけよう⑨		【思考・判断・表現】 論理的に考える力や共感したり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようになる。
	3	【話す・聞く】 【書く】 地域の魅力を振り返って		【主体的に学習に取り組む態度】 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

学習評価の在り方

学習評価についての考え方

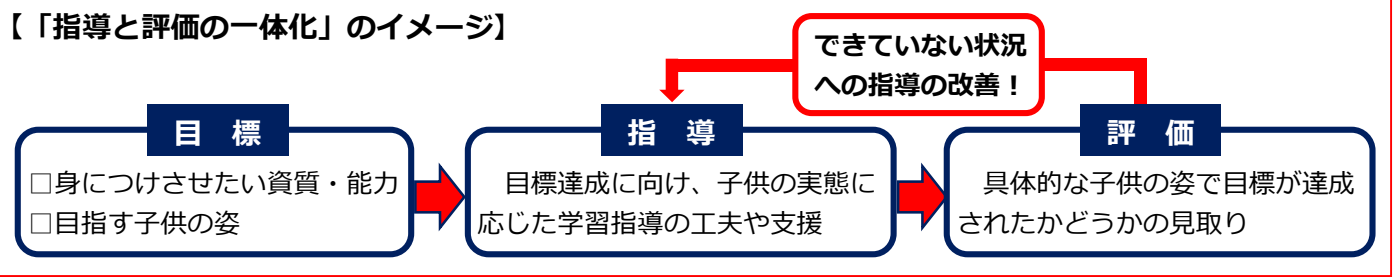
1 学習評価の改善⇒『指導と評価の一体化』について

新学習指導要領では「指導と評価の一体化」の必要性について記載され、「指導したことを評価し、評価したことは指導に生かしていく」ことを重要視しております。また、今回の改訂では、子供に「何ができるようになるのか」という視点に立ち、全教科等の目標及び内容が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学ぶに向かう力、人間性等」の資質・能力の3つの柱に整理され、学習評価が3観点で示されました。そのため、教師は子供に「**目標とする資質・能力が身に付いているか**」を見取る必要があります。「主体的・対話的で深い学び」の実現により、資質・能力を育成するためにも学習状況を的確に捉え、次の2つの改善に生かすことが求められています。

- (1) 「**授業改善**」に生かすこと・・・期待する子供の姿が見られなかった場合は、教師は目標の実現やつまづきの解消に向けて、次の指導に生かすこと。
- (2) 「**学習改善**」に生かすこと・・・子供が自らの学習を振り返り、次の学習へ生かすこと。

つまり、次に示すような「**指導と評価の一体化**」へ向けて取り組むことが重要です。

【「指導と評価の一体化」のイメージ】



「**指導と評価の一体化**」を常に意識しながら行うことで、評価が授業改善や学習改善へ結び付き、各教科等における目標達成につながります。これまで慣行として行われてきたことも、必要性や妥当性がない場合は「**見直す**」ことが必要です。実際に評価をしていく中で、毎時間全ての子供の学習状況を記録に残すことは難しく、現実的ではありません。

そこで、単元の中において下記に示す「**指導に生かす評価**」と「**記録に残す評価**」を計画的に位置づけることが大切です。下記のように計画的に位置付ければ、教師は記録ばかりに労力を割かれることが少なくなり、学習のつまづきなどの支援を行うなど、子供を「**見取る**」ための時間の確保ができるようになります。一番大切なことは、計画に基づいた指導と評価を行うことです。

「指導に生かす評価」

「**毎時間、意図的に行う評価**」のことです。

指導に生かす評価では、特に努力を要する状況の子供を中心に見取り、単元や本時の目標を達成するために必要な支援を行います。

目標達成のために、子供の学習状況を机間指導等で適切に見取り、できる子は更に伸ばし、困り感のある子は、その支援を行います。

「記録に残す評価」

「**評価する時間を精選して行う評価**」のことです。

記録に残す評価は、指導した内容について全員分の記録を残し、子供の達成状況を見取り、総括を行います。そのため単元のまとまりの中で指導した内容の達成状況が適切に見取れる段階で評価します。

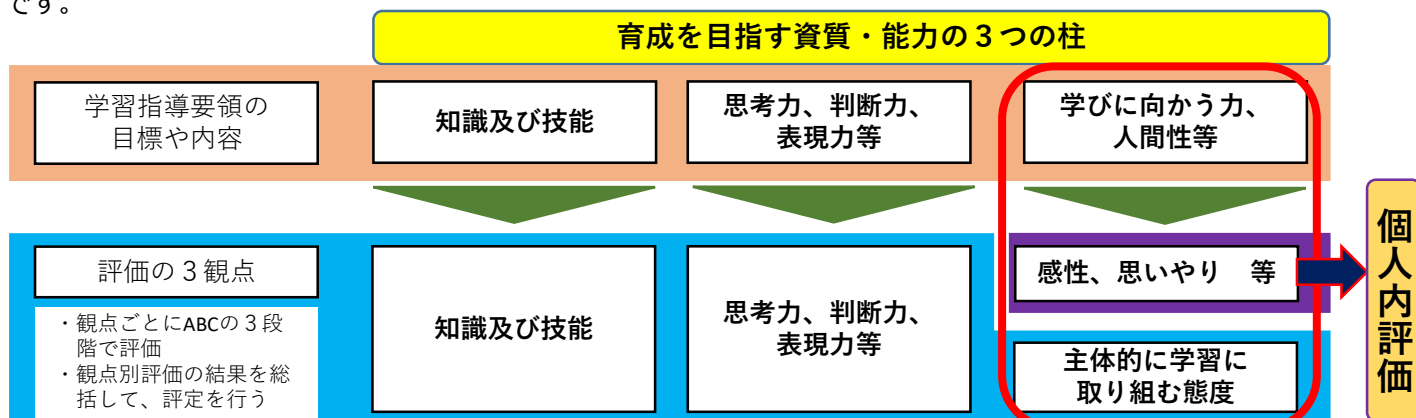
1回の授業で3観点全てを評価するのではなく、「**記録に残す評価**」の場面を精選して行います。

【「指導に生かす評価」「記録に残す評価」のイメージ】

	指導に生かす評価	記録に残す評価
評価の意義	Cの状況になりそうな児童生徒を見取り、Bの状況になるように適切に指導を行う（B→Aも含む）	単元等における総括の資料とする【ABCの評価】
対象とする子供	原則として全ての子供の記録を取ることを前提としない。	全ての子供の記録を取る。
評価の場	主として指導中に行う。	主として指導後に行う。
評価の方法	観察、発表、机間指導 等	ノート、レポート、作品、ペーパーテスト 等

2 学習指導要領が示す学習評価

学習評価は、学習指導要領に示す各教科等の目標や内容に照らして学習状況を評価するもので、目標に準拠した評価です。



「学びに向かう力、人間性等」は、観点別学習状況の評価を通じて見取ることができる「主体的に学習に取り組む態度」と、観点別学習状況の評価や評価になじまない「感性、思いやり等」に分けられます。

「感性、思いやり等」については、子供一人一人の良い点や可能性、進歩の状況等を個人内評価として見取り、その評価は「指導要録」の「総合所見及び指導上参考となる諸事項」及び「特別の教科 道徳」の評価において示されるとしています。

3 「観点別学習状況の評価」の3観点について

*参考…「学習評価の在り方ハンドブック」より

知識・技能

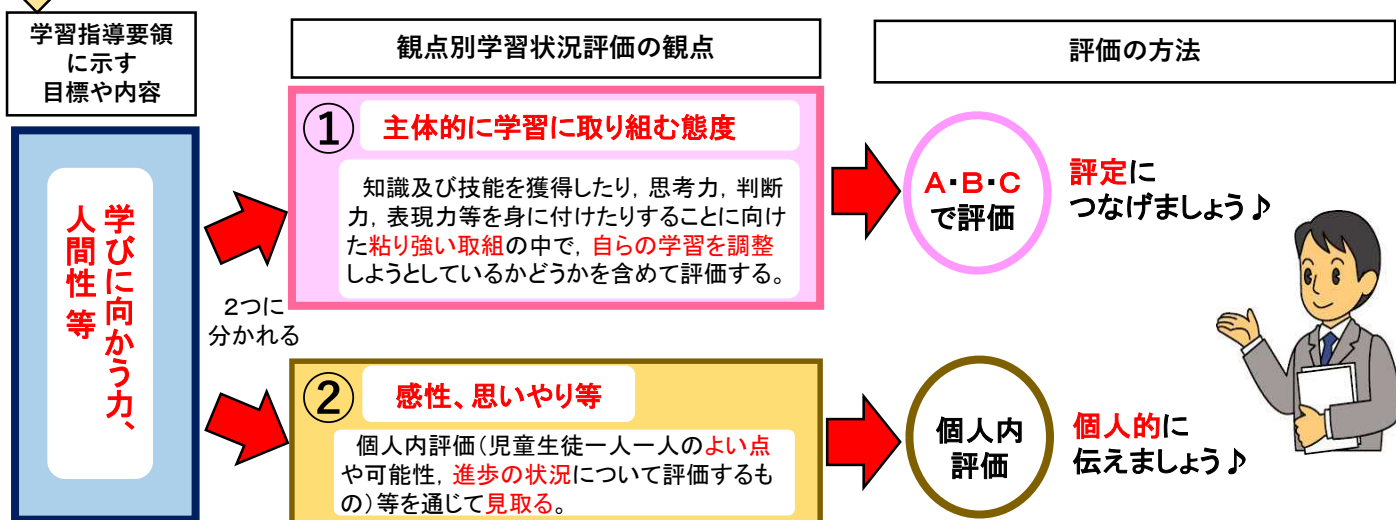
各教科等における学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況について評価するとともに、それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等として理解したり、技能を習得したりしているかについて評価するものです。

思考・判断・表現

各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身につけているかどうかを評価します。
自分の意見や考えを表現させたり、思考・判断させたりする等の学習場面を通して評価を行います。

主体的に学習に取り組む態度

下記①、②の側面から評価します。学習の進め方について試行錯誤する等の調整をしながら、学ぼうとしているかどうかを意思的な側面を評価します。適切に評価するためには、子供に学習の「めあて」や「見通し」をもたせたり、その達成状況を振り返らせたりすることが必要です。また、学習の途中にそのやり方等を調整しているかを見取することも大切です。子供の内面の変化を表出させる場面づくりが求められます。



※特に「感性や思いやり」など児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などについては、積極的に評価し子供に伝えることが重要。

4 評価規準の作成について

授業は「目標とする資質・能力を育成していく場」です。教師は、授業の目標が達成できたかどうかを見取るために評価を行います。そこで、適切に見取るためには「評価規準」が必要となります。

新学習指導要領では、育成を目指す資質・能力が3つに整理されていることを踏まえ、新学習指導要領の目標に記載されている文章を使うことで「評価規準」として適切に示すことができます。

下記に実際の授業づくりに向けて、小学校学習指導要領の算数を例に「2 内容」に記載された文章を活用した「内容のまとまりごとの評価規準」の作成について紹介します。

「内容のまとまり」とは、学習指導要領に示す各教科等の「第2 各学年の目標及び内容 2 内容」の項目等を、そのまとまりごとに細分化したり整理したりしたものです。つまり、各教科等は「内容のまとまり」ごとに育成を目指す資質・能力が示されています。よって、「**2 内容**」の記載は、**そのまま各教科等の学習指導の目標となりうるもの**となっています。

(例) 第3節 算数

- 第1 目標
- 第2 各学年の目標及び内容

第4学年

1 目標

2 内容

「内容のまとまり」とは、こちらの「2 内容」のことです。

A 数と計算

(1) 整数の表し方に関わる数学的活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

こちらが身に付けてほしい「知識及び技能」です。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア)億、兆の単位について知り、十進位取り記数法についての理解を深めること。

こちらが身に付けてほしい「思考力、判断力、表現力等」です。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア)数のまとまりに着目し、大きな数の大きさの比べ方や表し方を統合的に捉えとともに、それらを日常生活に生かすこと。

評価規準は、目標となりうる「2 内容」に記載されている文末表現を変えることで作成できます。

「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点とは、各教科等における該当学年の学習指導要領の「内容のまとまり」を確認し、その記載を活用して作成します。

「主体的に学習に取り組む態度」の観点とは、継続的な取組を通して現れる特質等を有することから「2 内容」に記載がありません。そのため「1 目標」を参考にしつつ、必要に応じ改善等通知(※)の観点の趣旨を参考に作成します。

※改善等通知→「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(通知)」(文部科学省初等中等教育局 平成31年3月29日付け 30文科初第1845号) P.6で説明

□内容のまとまりごとの評価規準(例)

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・億、兆の単位について知り、十進位取り記数法について <u>理解を深めている。</u>	・数のまとまりに着目し、大きな数の大きさの比べ方や表し方を統合的に捉え、それらを日常に <u>生かしている。</u>	・億、兆の単位について積極的に関わり、 <u>数学的に表現・処理したことを振り返り、そのよさに気づき、生活や学習に活用しようとしている。</u>

このように「2 内容」に記載された文章を活用することで、適切な評価規準を作成することができます。単元の目標を作成する際も、目指す子供の姿として評価することを踏まえ、適切な単元の評価規準となるように工夫します。

5 学習評価の進め方について

(※国研資料：「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」第3編「単元ごとの学習評価について」より)

各教科の単元における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要です。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、以下のように進めます。

なお、複数の単元にわたって評価を行う場合など以下の方法によらない事例もあることに留意する必要があります。

評価の進め方

留意点

(1) 単元の目標を作成する

□学習指導要領の目標や内容、学習指導要領解説等を踏まえて作成する。

(2) 単元の評価規準を作成する

□児童生徒の実態、前単元までの学習状況等を踏まえて作成する。

(3) 指導と評価の計画を作成する

□(1)(2)を踏まえ、評価場面や評価方法等を計画する。
□どのような評価資料(児童生徒の反応や作品等)を基に「概ね満足できる」状況(B)と評価するかを考えたり「努力を要する」状況(C)への手立て等を考えたりする。

***授業を行う**

□(3)に沿って観点別学習状況の評価を行い、児童生徒の学習改善や教師の指導改善につなげる。

(4) 観点ごとに総括する

□集めた評価の資料やそれに基づく評価結果(ABC)などから、観点ごとの総括的评价(ABC)を行う。

ポイント

「記録に残す評価」を行う時間の精選

上記(3)について… 毎時間、学級の子供全員分の記録を取り、評価することは時間的にも難しいところがあります。そのため、単元のまとまりの中で「記録に残す評価」を行う時間を精選します。その際、指導の流れから子供の姿が最も表出する場面や時間を設定することが大切です。

学習評価の3観点については、指導計画に合わせて評価を行うための適切な時間を設定することが重要です。また、3観点の内容を基に「子供の姿」として見取ること、評価可能な計画にすることも必要です。

単元において3観点を評価する留意点として、下記のものが考えられます。

知識・技能

教科によっては「知識・技能」を一緒に評価するもの、「知識」と「技能」を分けて評価するものがあります。それぞれの教科の特性に合わせて評価することが大切です。

※中学校においては、現行の学習評価の「理解」の観点も含めることに注意が必要です。

思考・判断・表現

授業中の課題発見や問題解決の過程において、子供が活動しているところを評価します。

授業中の言動や話し合い活動の様子、自力解決時の様子、学習の振り返りや自己評価等の記述内容を見取ることが考えられます。

主体的に学習に取り組む態度

挙手の回数やノートのスタンプの数等、性格や行動面が一時的に表れた場面を捉えての評価ではありません。

自らの学習を調整しながら、粘り強く学ぼうとしているか等、意思的な側面を捉え、適切に評価していくことが大切です。

上記の留意点を踏まえ、単元全体の中で3観点をバランスよく位置づけしながら、単元の「指導と評価の計画」を作成することが大切です。

ポイント

目の前の子供から具体的な姿を想定

上記「評価の進め方」の「*授業を行う」について… 毎日、授業を行っている目の前の子供を思い浮かべ「この学習活動であれば、Aさんは〇〇と答えるだろう」「Bさんなら〇〇ような考えをワークシートに書くだろう」「Cさんは〇〇が取り組めるようにしたい」等、いくつかの具体的な姿を想定します。そうすることで、本時における観点別学習状況の評価規準が、実際の「子供の姿」として具現化されることになります。

ポイント

評価することを「目的化しない」ために…

□学習内容や教材に合わせた**子供の具体的な学習状況の姿(見取り)**を具現化します。
□具現化した「見取り」が見られない場合には、子供の学習改善を図り、目標が達成できるように支援します。
□どのような場面で、どのような評価資料を基に「おおむね満足できる」状況(B)と評価するかを子供の具体的な姿で設定することが大切です。

6 観点ごとの総括について

※各教科ごとの詳細は、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所）」参照

集まった評価の資料やそれに基づく評価結果などから、観点ごとの総括的評価（A、B、C）を行います。
総括的評価を行う時期は、単元末、学期末、学年末等の節目が考えられます。
具体的な内容について、評価に係る記録の総括と評定について下記に事例を示します。

各学校で、総括の考え方や方法の協議を行い、共通理解を図っておくことが重要です。ここで挙げる例は、あくまでも参考です。**各学校の実態に応じた方法等を決定すること**が大切です。

（１）単元（題材）における観点別評価の総括の例

単元の目標や評価規準を基に、指導と評価の計画を立て「**記録に残す評価**」の場面を適切に設定します。
それぞれの場面で観点別に評価したものを総括します。

〈例１〉評価結果のA、B、Cを数値で表し、達成感で決める方法

（全6時間の場合）

A	B	C
3点	2点	1点

※判定基準の根拠例

例えば、AとBが同数の場合、割合は約83%となります。また、BとCが同数の場合、割合は50%となります。

評価の回数が増えても、この割合は変化しないので、このように基準を設定してあります。

学習活動	1	2	3	4	5	6	総括	単元の評価
知識・技能	3点			3点	2点		8/9点→89%	A
思考・判断・表現			2点			3点	5/6点→83%	A
主体的に学習に取り組む態度		2点		2点		3点	7/9点→78%	B

観点別評価	A	B	C
観点別の達成度	83%以上	82～51%	50%以下

〈例２〉評価結果のA、B、Cの数で決める方法

→ 評価結果のA、B、Cの数が多いものを、その観点の評価結果とする方法

※留意点

「A B」のように、同数の場合や「A B C」のように混在する場合は、あらかじめ総括の仕方を決めておく必要があります。

学習活動	1	2	3	4	5	6	単元の評価
知識・技能	A			A	B		A
思考・判断・表現			B			A	A
主体的に学習に取り組む態度				B		B	B

（２）学期末における観点別評価の総括の例

- ・単元において観点毎に総括した評価結果を合計して、それを基に学期末の総括をする場合。
- ・それぞれの授業で観点別に評価した結果を学期末にまとめて合計し、総括する場合。
（※総括の方法は、上記（１）を参考に考えることができます。）

（３）学年末における観点別評価の総括の例

- ・各学期末における評価結果を合計して、学年末に行う場合。
- ・単元において観点別に総括した評価結果を合計して、それを基に学年末の総括をする場合。
- ・それぞれの授業で観点別に評価した結果を学年末にまとめて合計し、総括する場合。
（※総括の方法は、上記（１）を参考に考えることができます。）

7 「観点別学習状況の評価」を総括した「評定」と「総括」

子供の学習の実現状況を小学校では3段階、中学校では5段階で評定します。ただし、小学校第1学年及び第2学年では評定はしません。

小学校	3：「十分満足できる」状況と判断されるもの
	2：「概ね満足できる」状況と判断されるもの
	1：「努力を要する」状況と判断されるもの

中学校	5：「十分満足できるもののうち、特に程度が高い」状況と判断されるもの
	4：「十分満足できる」状況と判断されるもの
	3：「概ね満足できる」状況と判断されるもの
	2：「努力を要する」状況と判断されるもの
	1：「一層努力を要する」状況と判断されるもの

(1) 学期末における評定への総括の例

- ・単元において観点毎に総括した評価結果を合計して、それを基に学期末の総括をする場合。
- ・それぞれの授業で観点別に評価した結果を学期末にまとめて合計し、総括する場合。
(※総括の方法は、下記の〈例1〉〈例2〉を参考に考えることができます。)

ポイント

「評定」と「総括」においても、学校全体で共通理解・共通実践の中で進めていくことが大切です。

(2) 学年末における評定への総括の例

- ・各学校の観点別評価から学年末の観点別評価を出し、それを学年末に総括する場合。
- ・各学期の評定を学年末の評定に総括する場合。
(※総括の方法は、下記の〈例1〉〈例2〉を参考に考えることができます。)

〈例1〉観点別学習状況の評価を数値化し、合計値で決める方法

観点別評価	合計値	評定（小学校）	評定（中学校）
A A A	9	3	5 または 4
A A B	8		
A B B A A C	7	2	3
A B C B B B	6		
B B C A C C	5		
B C C	4	1	2 または 1
C C C	3		

A	B	C
3点	2点	1点

ポイント

評価結果については、二者・三者面談や通知表などで、子供や保護者に対して丁寧な説明を行う必要があります。ここで大切なのは、子供にも保護者へ理解しやすい言葉、分かりやすい表現を使いながら説明を行うことが信頼性の向上につながります。

〈例2〉観点別学習状況の各観点の評価結果を点数で算出し、それを各合計値の満点に対する割合で評定に算出する方法

観点別の達成度	83%	82～51%	50%以下
小学校	3	2	1
中学校	5 または 4	3	2 または 1

※重要：「改善等通知」とは

「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録等について（通知）」（初等中等教育局 平成31年3月29日付け 30文科初第1845号）

文部科学省において「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成31年1月21日）を受け、新学習指導要領のもとでの学習評価が適切に行われるとともに、各設置者による指導要録の様式の決定や各学校における指導要録の作成に当たっての配慮事項等をまとめたものです。

主な内容は「学習評価の基本的な考え方」「学習評価の主な改善点について」「指導要録の主な改善点について」「学習評価の円滑な実施に向けた取組について」「学習評価の改善を受けた高等学校の入学選抜、大学入学選抜の改善について」等が示されています。

教科の学習評価

中学校 国語科



1 学習評価で大切にしたいこと

(1) 年間を見通した学習評価

国語科においては、1つの指導事項を年間で複数回繰り返して指導し、螺旋的、反復的に繰り返しながら資質・能力の定着を図ることを基本としています。そのため、年間を見通して、単元の目標や評価規準を設定することが重要になります。

「知識・技能」は各領域において指導が必要になります。「思考・判断・表現」の各領域において重点的に指導し評価する指導事項や、その単元で取り上げる言語活動例の確認も含め、指導事項が一覧できる年間指導計画表の作成が求められます。（「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」p47～50参照）

(2) 単元目標の実現のための言語活動の設定

当該学年で重点的に育成すべき資質・能力を明確にして、学習指導要領の言語活動例を参考に適切な言語活動を設定します。社会生活に必要とされる言語活動を設定し、試行錯誤しながら課題を解決する過程で言語能力を習得・向上させていけるような指導が求められます。

2 評価の観点と趣旨

「指導と評価の一体化」を図るためには、学習指導要領の目標や内容と合わせて、下記に示す評価の観点と趣旨を確認することで評価の基本的な枠組みを捉えることができます。単元の評価規準を作成する際に、この趣旨を踏まえた上で、単元で中心的に扱う指導事項を位置づけていきます。

なお、国語科においては、基本的には「内容のまとまりごとの評価規準」を単元の評価規準とします。5観点から3観点になりますが、指導事項から評価規準を設定して評価する点では、従前と変わりません。

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨	社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使っている。	「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域において、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりしている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを広げたりしながら、言葉がもつ価値を認識しようとしているとともに、言語感覚を豊かにし、言葉を適切に使用している。

3 内容のまとまりごとの評価規準を作成する際のポイント

知識・技能

当該単元で育成を目指す資質・能力に該当する〔知識及び技能〕の指導事項について、その文末を「～している。」として作成します。
育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもあります。

思考・判断・表現

当該単元で育成を目指す資質能力に該当する〔思考力・判断力・表現力等〕の指導事項について、その文末を「～している。」として作成します。
各指導事項の冒頭に当該単元で指導する一領域を「〇〇において」と明記します。
育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもあります。

授業構想の流れ

- Step 1 単元で取り上げる指導事項の確認
- Step 2 単元の目標と言語活動の設定（単元の目標を実現するために適した言語活動を、言語活動例を参考にして位置づける）
- Step 3 単元の評価規準の設定
- Step 4 単元の指導と評価の計画の決定
- Step 5 評価の実際と手立ての想定（実際の学習活動を踏まえて、「Bと判断する状況」の具体的な姿を明確に持つ必要がある）

主体的に学習に取り組む態度

国語科における「主体的に学習に取り組む態度」に係る観点の趣旨に照らして、意思的な側面を評価します。
なお、国語科では、次の4つの内容を全て含め、単元の目標や学習内容等に応じて、その組み合わせを工夫して評価規準を設定します。文末は「～している。」とします。

- ◆ 粘り強さ（例・積極的に ・進んで ・粘り強く 等）
- ♥ 自らの学習の調整（例・学習の見直しをもって ・学習課題に沿って ・今までの学習を生かして 等）
- ◆ 他 の 2 観 点【知・技】【思・判・表】において、重点的に指導する内容（特に粘り強さを発揮してほしい内容）
- ◆ 当該単元の具体的な言語活動（自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動）

例

第2学年「B 書くことⅡ」（言語活動例：B（2）イ）
本単元の言語活動：職場体験でお世話になった職場へのお礼状を書く

ポイント

「粘り強さ」と粘り強い取組を行う中で「自らの学習の調整力」を適切に評価できる評価規準を作成すること。

単元の評価規準例	粘り強く（◆）読み手の立場に立って、表現の効果などを確かめて文章を整え（◆）、これまでの学習を生かして（♥）、お礼状を書こうとしている（◆）。
----------	---